



[第1回]

# 江戸の貨幣と暮らし

## 統一貨幣のあけぼの

### 江戸時代の貨幣制度とは？

お金には物などと交換すること、値打ちを計ること、そして、貯めることの3つの働きがあります。こうした働きは、古の時代から現在まで、基本的にかわることはありません。私たちが昔を身近に感じることのできる時代劇の舞台、江戸時代のお金はどのような仕組みだったのでしょうか。

江戸時代、徳川幕府が流通させた金貨、銀貨、銭(銅)貨は、単位も性格も異なる貨幣を併存させた貨幣制度といわれています。幕府は全国通用の貨幣制度を定め、貨幣発行権の独占と、貨幣様式の統一を図りました。金貨は小判1枚の二両を基準に額面金額と枚数で価値を表す「計数貨幣」、銀貨は匁(≡3.75g)という重さの単位により価値を示す「秤量貨幣」、銭貨は1枚が一文の

「計数貨幣」というように、それぞれ別個の価値体系をもっていました。そして、各貨幣

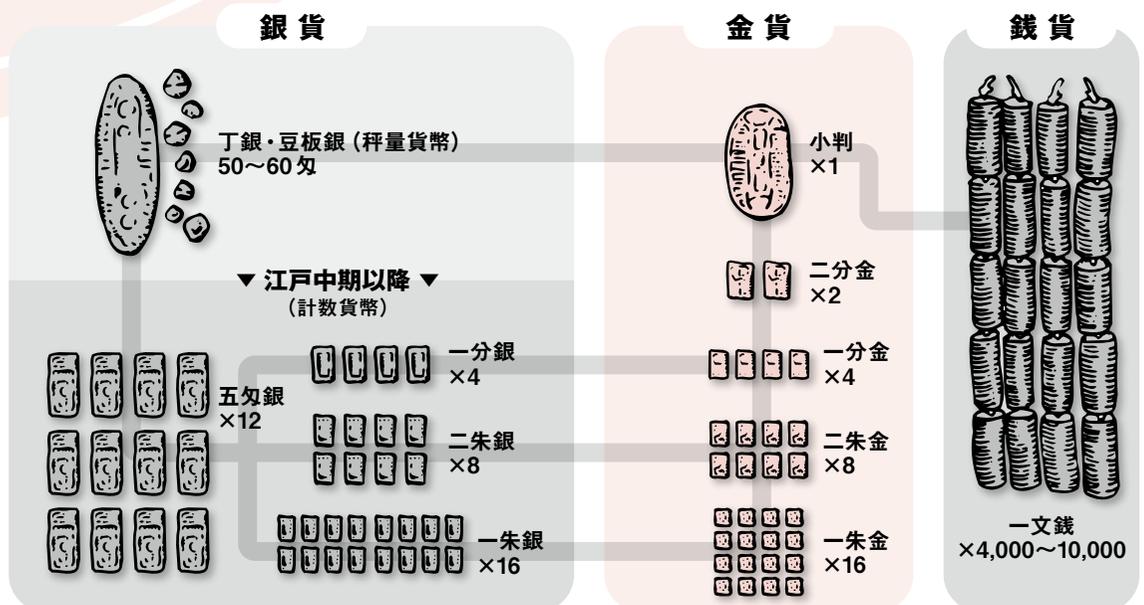
それぞれで交換(両替)するときには、その時々相場が用いられたのです。

さて、そのお金はどこで作られていたのかご存知ですか？

銀座(今の銀座二丁目あたり)で銀貨が製造されていたことをご存知の方は多いと思います。では、金貨はどこで製造されていたのでしょうか。江戸時代、小判や一分金など、大判以外の金貨は、「金座」という製造所で作られていました。江戸にあった金座の場所は、現在の日本銀行本店がある日本橋本石町なのです。

ちなみに大判は「大判座」というところで作られていました。

一両(小判一枚)を基準とした各貨幣等価表



## 江戸時代の暮らし、 そしてお金

それにしても江戸時代の貨幣制度は複雑でした。どうしてこんなことになったのでしょうか。金の産地があった東国を基盤に天下統一した家康は、はじめに金貨を中心とした貨幣制度の導入を試みました。一方、銀の産地の多い西国では、当時強い経済力を持つ大坂商人たちが東洋諸国との貿易に銀を使用していました。家康も西国での「銀遣い」の習慣を変えることは困難な状況でした。小額貨幣については、海外渡来や国内各地で作られたさまざまな銭貨が庶民の日常生活で使われていました。1636年の寛永通宝の発行以降、統一的な銭貨が安定して流通するようになりました。これにより「東国の金遣い、西国の銀遣い、そして銅貨（銭貨）は庶民」という三貨制度の仕組みが成立したのです。

ところで、時代劇にたびたび出てくる年貢米ですが、お米をお金に交換するにあたっては、現在の台東区蔵前にあった「札差（ふださし）」という仕事関わっています。当時幕府から旗本・御家人に支給されるお米を仲介したのがこの「札差」で、お米の受け取り・運搬・売却などの手数料をとる生業で

### ことわざや時代劇に出てくるお金はいくら？

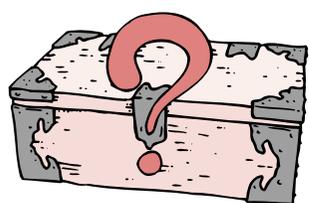
江戸時代のお金の価値が今のいくらに当たるかというのは、大変難しい問題です。一応の目安として江戸中期の1両を当時と現代の米価からみると約4万円、同じくそば代金でみると12～13万円となると言われています。ここではこれを頭に置いて想像してみましょう。

#### 「早起きは三文の徳」の三文っていくらくらい？

江戸中～後期の幕府の公定レートは、金1両＝銀60匁＝銭4,000文でした。1両が4万円～12万円だとすると、1文は10円～30円。したがって三文は、30円～100円ぐらいでしょうか。ちなみに「三文の得」と書く場合もありますが、「お金を得する」という意味ではなく、「ご利益がある」という意味です。

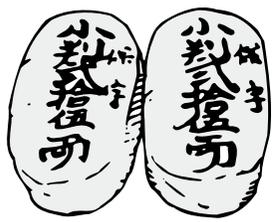
#### 千両箱っていくら入っているの？

江戸時代の歴史は265年と長く、当然のようにその間物価も変動しています。そのため千両箱に入っているお金の価値もずいぶん変化し、数百万円から数億円前後とかなり幅があると考えられています。



#### 落語の大金は五十両

「芝浜」「文七元結」「柳田格之進」など落語に登場する大金といえば五十両。「切り餅」（小判を和紙に包んで封印をした包み金の俗称）ふたつ分です。一両4万円なら200万円、一両12万円なら600万円となります。



す。札差の「札」とは米の支給手形のこと、蔵米の藁束に差して順番待ちをしていたことから、札差と呼ばれるようになりました。

さて「江戸っ子は宵越しの銭はもたねえ」などといいますが、これは江戸には数多くの職業があったことが関係しているようです。今でもそうですが、当時の江戸は100万人と世界最大の都市でした。江戸に住むたくさんの人と、その人々に向けられた数々のサービスがさまざまな職業を生み出していたのです。たとえば、水道水がなかったこの時代、水売り歩く商売の「水屋」。時代劇で

見る井戸のほとんどは川から引き込んだ水を溜めておき、それを樋で渡しています。この樋が行き渡らない場所へは「水屋」が売り歩いたのです。

こうした商売をはじめ、多くの商売のほとんどは、明日からでも個人で手軽に始められるもの。つまり「今日一文も無くなっても明日稼げばよい」ということが真相のようです。ただし「宵越しの銭」の使い道は「チップ」だったり「仲間振舞う」ことが多く、自分のために使うことばかりではなかったそうです。